当代外语研究论丛
FOREIGN LANGUAGES STUDIES
外国文学研究系列

教育部人文社科研究青年基金项目资助

日语感情词汇的历时研究（日文版）

——以表达「嫉妬」「羨慕」「遺憾」「憤怒」的和语词汇为对象

日本語心情語彙の通時的研究

——「嫉妬」「羨望」「残念」「憤怒」の心情を表す和語語彙を対象に——

陈岗◎著

上海交通大学出版社
SHANGHAI JIAO TONG UNIVERSITY PRESS

当代外语研究论丛
FOREIGN LANGUAGES STUDIES

教育部人文社科研究青年基金项目资助

日语感情词汇的历时研究（日文版）

——以表达「嫉妬」「羨慕」「遺憾」「憤怒」的和语词汇为对象

日本語心情語彙の通時的研究

——「嫉妬」「羨望」「残念」「憤怒」の心情を表す和語語彙を対象に——

陈 岗◎著

上海交通大学出版社
SHANGHAI JIAO TONG UNIVERSITY PRESS

安徽师范大学图书馆
藏书

内容提要

本书以日语感情词汇为研究对象，在归纳前人在词汇史领域研究成果的基础上，以表达“嫉妒”“羡慕”“遗憾”“愤怒”的系列词汇为主要对象，选取岩波书店《日本古典文学大系》中的几十部主要作品作为资料来源，查找其中所有相关例句，通过梳理，对系列词汇的意义、用法的历史变迁进行了较为全面和细致的表述和解释。

图书在版编目(CIP)数据

日语感情词汇的历时研究：以表达“嫉妒”“羡慕”“遗憾”“愤怒”的和语词汇为对象：日文 / 陈岗著. —上海：上海交通大学出版社，2016

ISBN 978-7-313-15473-6

Ⅰ.①日… Ⅱ.①陈… Ⅲ.①日语-词汇-研究-日文 Ⅳ.①H363

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2016) 第 165201 号

日语感情词汇的历时研究

——以表达“嫉妒”“羡慕”“遗憾”“愤怒”的和语词汇为对象(日文版)

著　　者：陈　岗
出版发行：上海交通大学出版社　　地　　址：上海市番禺路 951 号
邮政编码：200030　　电　　话：021-64071208
出 版 人：韩建民
印　　刷：虎彩印艺股份有限公司　　经　　销：全国新华书店
开　　本：880mm×1230mm　1/32　　印　　张：7.125
字　　数：197 千字
版　　次：2016 年 9 月第 1 版　　印　　次：2016 年 9 月第 1 次印刷
书　　号：ISBN 978-7-313-15473-6/H
定　　价：32.00 元

版权所有　侵权必究
告 读 者：如发现本书有印装质量问题请与印刷厂质量科联系
联系电话：0769-85252189

序

陳崗氏の日本での研究生活は、一年間の交換留学生を経て、二〇〇四年から二〇一〇年の間、通算七年間に及ぶ。日本語の「古典語」の語彙を研究対象とし、他ならぬ「心情語彙」の研究に邁進した同氏にとって、この長期にわたる留学期間は、顧みて、研究テーマが要求する必然のものであったのである。

南開大学大学院修士課程在学中に、日本国立鳴門教育大学大学院に聴講生として一年間在籍、数年後、再び鳴門教育大学大学院に研究生として在籍、続いて二〇〇五年四月に鳴門教育大学大学院修士課程に入学した。特筆すべきことは、鳴門教育大学在学時に日本国政府の国費留学生に採用されたことである。陳崗氏がふさわしい資格を備えていた所以であり、またそのことによって、日本での学業と研究生活を推進していくうえでの自信と安定を得たことは大きな力となったと思われる。

鳴門教育大学大学院では、国語学担当の原卓志教授の主指導のもと、日本古典語の語彙の変遷を対象とする領域に研究分野を方向付け、「心情を表す類義形容詞の歴史的研究」の題下で修士論文を作成した。この論文の評価される点は、分析対象として類義的な心情語を数語に絞り、上代から中世に至る主要な文学作品を通時的に調査分析していることである。一般に中国人留学生にとって、日本の古代から中世に至る多くの和文資料を読解することは並大抵のことではない。陳崗氏は、修士論文の作

成過程で、日本の主要な古典文学作品を対象として、テキストを忠実かつ適確に読解する鍛錬を積んでいることが、後の研究推進の礎となっている。

鳴門教育大学大学院修了後は、引き続き、同大学も連合の構成大学となっている兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科博士課程へ進学した。博士課程では、修士論文の研究成果をさらに発展させるべく、研究テーマを「日本語心情語彙の通時的研究」とした。これは当時、日本の国語学界の新しい研究動向でもある語彙史研究としての展開に照応するものであった。なお、心情語彙は人間の心理や感情にかかわる広大な領域であるため、対象を「嫉妬」「羨望」「残念」「憤怒」の心情に特定し、和語語彙を対象に取り組むことにした。

陳崗氏の研究は、日本の古典語を中心に古代から近代に至るまでの主要な文学作品を対象とした通時的研究であり、人間の心理や感情に発現する心情語彙についての意味用法の変遷についての分析である。前者には古典語のテキストを読む力及び心情語に関する先行研究の適確な参照、後者には人間の心理や感情にかかわる総合的な知見の援用が不可欠である。そのため陳崗氏は、持ち前の粘り強さで、日本の主要古典文学作品を渉猟し、可能な限り、先行の研究文献を参照し、地道な努力を重ねて本書に結実させた。

日本語の和語の歴史の中で、古代以降、「嫉妬」「羨望」「残念」「憤怒」などの漢語で表される心理ないし感情に発現する語彙は、心情語彙の中でも、意味用法上、とりわけ複雑で微妙な様相を呈している。このような対象領域に孜孜として取り組み、学位論文に完成した陳崗氏の努力を多とし、一般言語学上も価値あるこの研究の更なる展開を期待するものである。

二〇一六年五月

岡山大学名誉教授　吉田則夫

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

凡例

1 用例を引用するに際して、その所在をそれぞれのテキストの頁（万葉集は歌番号）で示した。

2 用例の検索と用例数の計数に際して、調査文献一覧に掲載した索引のほか、日本の国文学研究資料館「日本古典文学本文データベース」、統計数理研究所村上研究室編「源氏物語本文研究データベース」などを使用したが、データの掲出に際し修正した箇所がある。索引のないテキストのデータは、筆者自身が計数したものである。

3 該当語右傍の傍線、波線は、筆者によるものである。

4 振り仮名は、テキスト文献によるが、論旨に関係のないものを省略することがある。この場合、煩雑をさけて、一々断らなかった。

5 漢字の旧字体は現行字体に改めた。

6 人名敬称は略する。

目次

序章　日本語心情語彙研究の基礎と動向 …… 1
はじめに …… 1
第一節　心情 ——その用語と下位概念の派生過程—— …… 2
第二節　日本語心情語彙の下位分類とその認定基準 …… 5
第三節　日本語心情語彙の意味記述の方法 …… 12
第四節　日本語心情語彙の体系的研究の概観とコーパス資源 …… 13
第五節　感情心理学、感情言語学と人工知能（AI）研究 …… 15
第六節　まとめと今後の研究動向 …… 16
第一章　研究の目的・方法・対象 …… 19
第一節　研究の目的・方法・対象 …… 19
第二節　心情の概念 ——種類と構造—— …… 23
第三節　先行研究の纏め …… 27
第四節　本書における基本的用語について …… 38

第二章　日本語心情語彙の史的総覧　――形態上の整理――　……43
はじめに　……43
第一節　各時代における心情語彙の総覧　……47
第二節　語構成からみた心情語彙の史的展開　……64
第三節　品詞からみた心情語彙の史的展開　……67
第四節　正の心情を表す語彙と負の心情を表す語彙　……70
第五節　まとめ　……72
第三章　「妬し」「妬む」「妬まし」の系譜　……75
はじめに　……75
第一節　上代における「妬(ねた)」を語幹とする語彙の意味　……78
第二節　中古における「妬(ねた)」を語幹とする語彙の意味　……79
第三節　中世における「妬(ねた)」を語幹とする語彙の意味　……83
第四節　近世における「妬(ねた)」を語幹とする語彙の意味　……86
第五節　近現代における「妬(ねた)」を語幹とする語彙の意味　……87
第六節　まとめ　……89
付節　「そねむ」「そねまし」の語史　……90
第四章　「や(病)む」とその派生語の語史　――「うらやむ」「心やむ」など――　……99
はじめに　……99
第一節　「や(病)む」「やまひ(い)」「やまし」の意味　……102
第二節　「うらやむ」「うらやまし」の意味　……106

第三節　「心やむ」「心やまし」の意味　……113
第四節　まとめ　……115
第五章　「くち惜し」の語史　――「惜し」「くやし」との関係から――　……119
はじめに　……119
第一節　上代における「惜し」の意味　……121
第二節　「くち惜し」の意味　……126
第三節　「くやし」の意味　……138
第四節　まとめ　……142
第六章　「憤怒の心情」を表す語彙の史的変遷　――和語動詞、形容詞を中心に――　……145
はじめに　……145
第一節　上代における「憤怒の心情」を表す語彙　……149
第二節　中古における「憤怒の心情」を表す語彙　……152
第三節　中世における「憤怒の心情」を表す語彙　……154
第四節　近世における「憤怒の心情」を表す語彙　……158
第五節　近代における「憤怒の心情」を表す語彙　……161
第六節　まとめ　……163
結章　……167
参考文献　……173
索引　……212
後書き　……215

序章　日本語心情語彙研究の基礎と動向

はじめに

心情語彙は人間が感情、心情、情感、情緒などを表す語の集合である。人間の内的世界の重要な一部分を表しており、生活語彙において不可欠のものである。それに関する記述と研究は、古くから哲学、心理学、文学などの分野にわたって多く見られるものの、現在に至ってなお多くの問題が残されている。一方、今日、認知と人工知能（AI）研究の急速な発展が学界及び世間の注意を集めている。心情は人間の認知の対象でありながら、外的世界を認知する重要な手段でもある。人工知能（AI）研究においても重要な一環となっている。したがって、心情の処理はこうした背景で、研究焦点の一つになっており、それに関する心情語彙ないし心情の言語的表現に関する研究は言語学界の焦点の一つにもなりつつある。本章は巨視的、総合的、歴史的視点から、日本語心情語彙関係の記述と研究について整理し、今後の研究のための土台を固め、また研究の動向を予想したい。

日本において、心情の体系的研究について、近代の九鬼周造（一九三八）「情緒の系図」がみられる。

それは、人類の身体構造に似た図形で心情の内部構造を描いたものである。心情語彙に関する研究は戦後になって多く見られるようになり、その多くは特定の心情語の意味用法に関する記述である。その体系的研究は、前田富祺（一九九三）「日本語の感情を表すことば」、河原修一（一九九八）「感情を表す日本語の言葉」などがあげられるものの、今にいたって、本書の調査範囲の限り大きな発展が見られなく、現段階ではなお語彙の体系ができたとは言いがたく、他の分野の語彙、例えば身体語彙、色彩語彙、衣食住生活語彙などと比べて、研究が遅れているといえよう。

語学研究としての心情語彙研究は、その研究対象の特性で、心理学、哲学、人工知能（AI）などの分野と密接な関係をもつ。本章は、その体系的研究の基礎を築くために、心情の概念と派生の過程、心情語の認定と意味記述の方法、心情語彙の収集整理など、本研究に関係する基礎的問題について総合的考察を行いたい。

第一節　心情

――その用語と下位概念の派生過程――

「心情」の類義語として、日本語に「感情、情感、情緒、情動、情操、気分、気持ち、心持ち」などがあげられる。それぞれが語義、語感及び使用場面などに細やかな差異が認められようが、本書ではそれについては触れず、「心情」の語をもって、主体（主として人間また動物）の感情的特徴をもつ心理的状態と心理的活動を表す。

心理学では、感情的特徴をもつ心理的状態と心理的活動を表すには、普通「感情」の語を用いる。それは英語「feeling」の訳語として、井上哲治郎（一九一二）『哲学字彙　第三版』に複数回用いられ、その後「emotion」の訳語として用いられ今日に至る。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

漢籍において「感情」の用例が、晋の劉玲「酒徳頌」における「不覚寒暑之切肌、利欲之感情」、唐の白楽天の「感情」を題とする詩における「為感長情人、提携同到此」などがみられる。しかし、これらの用例はいずれも「動詞＋名詞」の語構造であり、「情に感ずる」と理解されるべきであろう。つまり、「感情」という概念は漢籍では「情」という一字で表されているのである。

「心情」[注1]の内容は中国と日本でよく「喜怒哀楽」に代表されている。中国では古くから「六情」また「七情」の説がある。「六情」には主として二説があり、春秋時代の『左伝・子産論礼』と戦国時代の『荀子・生名』における「好悪喜怒哀楽」と、後漢の『白虎通義』における「喜怒哀楽愛敬」という六種の心情である。一方、「七情」は前漢『礼記・礼運』における「何謂人情、喜怒哀楽愛悪欲、七者弗学而能」に出自するものとされる。

心情の派生については、『礼記・楽記』には「人生而静、天之性也。感於物而動、性之欲也、物至知知、然後好悪形焉」という記述がある。つまり、天性から「欲」が生まれ、「欲」から「好悪」が生まれるというのである。西洋においては、哲学者プラトン（-427—347）は「中性的」心情から「喜苦」の心情が発生すると論じ、アリストテレス（-384—322）は「喜苦」の心情は他のあらゆる心情の根本と論じた。その後、基本的心情について、デカルト（1596—1650）は「驚愛憎欲喜悲」、スピノザ（1632—1677）は「悲喜願う」などを指摘した。[注2] 近代以降、多くの心理学者が心情の下位分類を試みた。その中Pultchik, R（一九六〇）「The Multifactor-Analytic Theory of Emotion」・（一九八〇）「Emotion: Theory, research, and experience」は基本的心情として「Joy（楽）、Trust（信）、Fear（恐）、Surprise（驚）、Sadness（悲）、Disgust（嫌）、Anger（怒）、Anticipation（望）」などの八種を纏め、また以上の基本的心情とそれらの複合で発生した心情でできた心情の構造図を提出した。

Pultchik, Rの影響を受け、日本の心理学者上杉喬（一九八一）「感情イメージの研究」は「喜望愛驚

悲恐怒嫌」という八種の基本的心情を提出し、鈴木賢男（二〇一二）『感情イメージ調査』についての研究（Ⅳ）」は「感情価」という数量的基準をもって一連の測定をした上で、この八種の基本的心情のほかに「信拒憎確疑尊恥好」という八種の感情を補足し、十六種の基本的心情を提出した。また同時に「嫌悲喜怒」はもっとも基本的心情であると指摘した。

以上、古今の哲学、心理学などの関係記述に基づいて、心情の派生過程またその基本的構造について次のように整理したい。

〈心情の派生過程と基本的構造〉

心情は「欲」を源とするものであり、まず、正と負の方向で「好悪」の心情を派生し、次に、「好悪」から「喜怒悲恐」などを派生する。さらに、これらの基本的心情をもって多様な複合的心情を形成し、最後に、これらの基本的心情と複合的心情をもって、多層的で複雑な心情の体系を形成する。[注3]

右の整理から、心情の各下位分類は平行するものではなく、多層的で構造化した形で存在するものであることが分かる。このような心情の体系は上述の九鬼周造（一九三八）「情緒の系図」、Pultchik, R（一九八〇）「Emotion: Theory, research, and experience」において、分析を試みられたが、心情のもつ多様かつ複雑な内部要素が原因で、その構造の具体像の解明はなおできたとは言いがたい。この問題の解決に向けて、日本の心理学また脳科学分野では、往住彰文（二〇〇七）『こころの計算理論』の心情数値の測定、片平健太郎等（二〇一三）「情動と意志決定の数理モデル」における心情モデルの構築などの研究が進められ、心情の構造が近い将来に解明できると期待される。

『礼記・礼運』における「七者弗学而能」という記述のように、心情は人間が生まれつきの本能の

一つである。しかし、従来の認知の世界では、人がこの内的の抽象的な心情に対する認知は、他の外的の具象的事物に対する認知と比べて、遥かに遅れているのも事実である。

第二節　日本語心情語彙の下位分類とその認定基準

本章では、心情語彙を「心情そのもの、また心情の特徴をもつ心理状態と心理活動を表す語の集合」と定義する。日本語心情語彙は品詞上、名詞、形容詞、形容動詞、動詞などを含む。心情語彙については、多くの先行研究がみられるものの、その中の二つの基本的問題、つまりその下位分類また認定基準については、なお明らかにされていないところがある。以下、先行研究の成果を纏めて、本章の観点を示したい。

各品詞性の日本語心情語彙では、形容詞と動詞の数量が圧倒的多いので、それらの分類は心情語彙の認定に決定的な意義をもつ。

（一）形容詞の下位分類と心情形容詞の認定基準

語義の視点から日本語形容詞に対する分類は、時枝誠記（一九五〇）『古典解釈のための日本語文法』における「客観的表現の語」「主観的表現の語」「主観客観の総合的表現の語」はその最初である。その後、西尾寅弥（一九七二）『形容詞の意味・用法の記述的研究』における「属性形容詞」「感情形容詞」「感情と属性の両面をもつ語」という分類、寺村秀夫（一九八二）「感情表現――動的事象の描写と性状規定の境界性」における「感情状態の直接表出」「感情的判断」「属性規定」という分類、山口佳紀（一九八五）『古代日本語文法の成立の研究』における「形状形容詞」「評価形容詞」「感情形容詞」「感

覚形容詞」の分類がみられる。細川英雄（一九八九）「現代日本語の形容詞分類について」・（一九九三）「形容詞の主観性について」は、従来の分類に基づいて11項目の詳細な分類をした。[注6] 以下、感情語彙の認定を目的に、上述の分類に基づいて、日本語形容詞の下位分類を次のように新たに提出したい。

表1　日本語形容詞の下位分類

	下位分類	語例
ア	形状形容詞	丸い、広い、重い
イ	心情形容詞	嬉しい、こわい、悔しい
ウ-1	性状的判断を含む形容形容詞	よい、素晴らしい、美しい
ウ-2	心情的判断を含む評価形容詞	好ましい、恐ろしい、怪しい
エ	感覚形容詞	かゆい、痛い、眩しい

本章では、「心情形容詞」にはイ類とウ-2類を含む[注4]（以後、それぞれ「心情形容詞A」と心情形容詞B」と称する。その具体的認定基準は次の通りである。

〈基準Ⅰ、「心情形容詞A」〉

表2　心情形容詞Aの分類基準

意味上	文構造上
主体（主として「私」）が、ある物事に接して生じた心理的状態を表す。	心情語述語文では、主体が主語として働き、物事は（事由を表す）連用修飾語または対象語として働く。

その使用例[注5]として、次のものがあげられる。

1　気に入ってくれて嬉しいよ。　（山崎豊子・二つの祖国）

2　七生のその気持ちだけで嬉しいよ。　（高岡ミズミ・ハッピーハーレム）

3　大きな碑が建てられたのが嬉しい。　（安西篤子・山内一豊と千代）

4　日本の林檎にはない、昔ながらの健康な酸味が嬉しい。（桐島洋子・刻のしずく）

〈基準Ⅱ、「心情形容詞B」〉

表3　心情形容詞Bの分類基準

意味上	文構造上
人にある心情を生じさせる物事の状態を表す。	心情語述語文では、物事は主語として働く。

その使用例として、次のものがあげられる。

5　お茶で我慢するほど倹約家の人が、お銚子を五本も六本も注文したのが怪しい。

（田中雅美・死神村の三百歳探偵団）

6　その夫婦が怪しいんですか？

（西村京太郎・伊豆の海に消えた女）

このように基準Ⅰと基準Ⅱは，根本的には、主語となるのは心情の主体か、または対象の物事かによって、「心情形容詞A」と「心情形容詞B」を判別するのである。ただし、例（6）のように、その文の主語となるのは、第二人称の相手かまたは「夫婦」かを判断する時に、考察者によって食い違いが生じる可能性がある。

さらに、基準Ⅰと基準Ⅱをさらに明確にするため、次の基準Ⅲを補足として設定する。

〈基準Ⅲ：補足的基準〉

表4　補足的基準

	コロケーション
心情形容詞A	「―気持ち／心」または「気持ち／心が―」が成立する
心情形容詞B	「―気持ち／心」または「気持ち／心が―」が成立しない

つまり、「―気持ち／心」または「気持ち／心が―」というコロケーションが成立する場合は「心情形容詞A」であり、成立しない場合は「心情形容詞B」である。

また、さらに補充しておくべきのは、上述の基準を適応するには、考察者の個人的主観性を避けるため、できるだけコーパスまたは文学作品における実例を用いるべきである。次に、本章では、表1のように形容詞の下位分類を設定したが、特定の語では、文中の活用によって同時に異なる下位分類に属する場合もみられる。例えば、「天気が寒い」、「心が寒くなる」という二つの文に「感覚形容詞」から「心情形容詞A」への転用がみられる。また、「ニュースを聞いて、嬉しくなった」「嬉しいニュースだ」には「心情形容詞A」が連体修飾語として用いられる場合、評価形容詞（心情形容詞B）への転用が見られる。

（二）動詞の下位分類と心情動詞の認定基準

形容詞と比べて、語義の視点からみた日本語動詞の下位分類は比較的単純である。関係の記述は金田一京助（一九四一）『新国文法』における「意志動詞」「非意志動詞」、寺村秀夫（一九八二）「感

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com